

2022年度 自己評価・学校関係者評価

認定こども園 西那須野幼稚園

本園では、教職員に対してチェック方式による自己評価を実施しております。
認定こども園への移行に伴い、2019年度より評価の結果を公表します。

・評価は3段階評価 [達成されている、概ね達成されている、未実施・取り組みが不十分]

評価項目	自己評価	取り組み内容
教育理念や方針の理解 環境構成 教育課程の編成 評価と反省	概ね達成	保育日誌 カリキュラム、保育計画 月の予定・反省 状況に応じた行事開催
健康と安全への配慮 幼児のみとりと理解 指導とかわり 保育者同士の協力・連携	達成	視診、体調確認 感染症対策 避難訓練 年齢や発達に沿った見守り 混合保育
教師としての能力や適性 良識とマナー 保育の楽しみ・喜び 感性・周りへのアンテナ	達成	教材資材管理 ミーティング 職員会議 主任会議
保護者支援 情報の発信と受信 守秘義務の遵守 クレームへの対応	達成	園だより、集団だより 重要事項の説明 守秘義務の遵守 保護者相談
地域の自然 地域とのかかわり 小学校との連携	概ね達成	子育て支援、園庭解放 リ・ユニオンデイ 小学校訪問 山林自然観察園
研修・研究への意欲や態度 専門性に関する研修・研究 遊具や教材に関する研修・研究 園の環境に関する研修・研究 自らを高めるための学習	概ね達成	職員研修(園内外、オンライン含む) 学習会 研修報告 専門紙の回覧 専門機関との連携



- ・コロナ禍が続く中、職員の感染も重なり、2学期まで互いに仕事をカバーしながらとなり、負担も多かったように感じました。
- ・打ち合わせや会議に集まることもできるだけ避けて、職員にお知らせを配付しながら共通理解できるように心がけましたが、なかなかスムーズにできないこともありました。しかし、正職員のほとんどの参加で、園のカリキュラムの見直しを行うことができたことはとても良い時間でした。見直しをしながら、幼稚園教育要領の『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』の確認もできました。
- ・感染状況により、7月の保護者との面談ができなかったため、2学期11月に面談を行い、保護者と情報交換をする時間を設けました。また保護者からの『保育参観に代わるものを何かやって欲しい。』という要望を受けて検討し、1学期には年中・年長の運動遊びに参観日を実施しました。クリスマス祝会や2月の発表会等でも保護者にどのように来園していただくかを検討し、状況を考えながらもできることをやってみようという姿勢で取り組みました。子ども達の挑戦の機会にもつながり、保護者に来園していただき、園での様子の理解につながったかと思えます。
- ・前年度に行った園内研修の中で、みんなが共通理解をして保育に活かしてよかったという反省があげられていたので、今年度も3日間園内研修の時間をもちました。『発達障害のこどもに対する保育の取り組み方・考え方』の研修では、講義偏と質問編があり、園内職員からも多くの質問があったのでワークシートをまとめて送信しましたが、取り組みについて考えてみる良い機会になりました。『子どもを傷つけるマルチリートメントを学ぶ』の研修も、子育てについて考え、保護者の気持ちを考えていくことを再認識でき、参考になりました。
- ・2年目の取り組みの個人購入の月間絵本は、各クラスでの活用もさらに定着・工夫されて、題材の国に関心が持てるよう特産品付きのイラストマップを掲示するクラスや木の実や虫等、季節に合わせて関心が持てるようにポスターにして掲示をしたり、園庭で実際に確認したりもできました。これからも、子ども達と「絵本って楽しい！」と親しんでいきたいと思えます。
- ・家庭では戸外遊びが不足している状況でしたので、園生活では戸外での時間をできるだけ多く持てるようにと過ごしました。園庭で全園児での混合保育も、前年は控えたり時間を短くしたりしていましたが、今年度は予定通りに計画し進めました。それでも運動面の発達については心配されるところです。また戸外では交流の時間を持つことができましたが、残念ながら室内では、異年齢の関わりとしての縦割りでクラス

同士での交流は控えるようにしました。

- ・園バスでの置き去り事故のニュースを聞いて、それまで以上に園児の確認に気を付けるようにし、確認名簿を作成したり、登園が遅れている場合には、安否確認の為に必ず連絡を入れるようにしました。また虐待のニュースには心痛めながら、自分たちの保育の振り返りをしました。次年度には、虐待防止のためのチェックリストを実施していくために検討中です。体罰について等の考え方が時代と共に変わってきているので、十分認識し対応していかなければならないと思いました。
- ・子どもの声に耳を傾け、つぶやき等メモに取って記録したり、幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿を日誌の後ろに貼って、いつでも見られるようにしたり、楽しいエピソードが拾えるように、日々の中で出来事を記録できるようにする等、各保育者の取り組みを互いに参考にしながら、これからも協力し合っていきたいと思います。

今後の課題と目標 《園長 福本 光夫》



新型コロナウイルス感染拡大から3年過ぎるなか、以前からのインクルーシブ保育に加え、スタッフ一同が原点に立ち返って再構築してきた保育実践が実を結びつつある。昨年度は、インクルーシブ教育実践について月刊専門誌「保育ナビ(フレーベル館)」に2度、今年度は、専門書「子どもひとりひとりがかがやく個別指導計画(市川奈緒子・仲本美央 フレーベル館)」に保育実践が掲載された。年度末には、栃木県総合教育センターの推薦により、文科省の「幼児教育の好事例の収集・蓄積に関する調査」事業に保育事例を報告する機会も与えられた。

また、今年度は、市立東那須保育園民営化に応募して、不採択という結果であったが、保育理念と実践は市から評価され、改めて自園の教育・保育について総合的に見る機会を与えられた。

ところで、子ども達が社会で活躍しているであろう2045年はAIが人間を超える「シンギュラリティー」と言われている。このコロナ禍で私たちが直面している以上に、子ども達はその時々々の適解を探求して生き、非認知能力と言われる折れない心(レジリエンス)、自己統制力(意思・感情・行動)、価値観の違う人と一緒にやり遂げる力等が求められる。その非認知能力の基礎が幼児期の遊びや他者との協働による課題解決を通して育まれると言われている。

当園は自己評価や学校関係者評価に基づく更なる保育の質的向上を目指したいと考える。同時に、建学の精神に基づく、他者の心の痛みを感じて共に生きる力を身につける地球市民をも念頭に置き、保育目標の両輪として継続したい。

担任教師の自己評価のなかに、落ち着きのない子どもが増えたという記載が見られた。東日本大震災の年に岩手県・宮城県・福島県の重篤な被災地に生まれた子どもは落ち着きのない子が多く、その追跡調査では、語彙数が少ない子どもの増加、後天的知的発達遅滞の比率が増え、その原因の一つが不安のなかの子育てと報告されている。今後、このコロナ禍の子ども達も同じような道を歩まないように、絵本の読み聞かせに加え、何らの対応を家庭と連携して行う必要がある。

また、外国をルーツとする子ども達も増えて、多様性を大切にした保育の課題についても追究していきたい。

次に自己評価で得られた項目からの課題目標について触れたい。「地域の自然や社会とのかかわり」の項目については、コロナ禍前に近づきつつあり、幼小連携では学校訪問・交流が復活し、ウイズ・コロナのコミュニティ・インクルージョンの再構築をしつつある。「自然との関わり」においては、感染リスクが少ない附属山林観察園の四季を体験活用することができた。

「保護者への対応」については、副園長・クラス担任がかなり努力した。特に、コロナ禍、ウクライナ戦争による不安のなかで、様々な意味で限界にきている家庭が増えていて、支援を必要とするご家庭が増加するだけでなく、内容においても他の機関との連携を要することが多かった。年度後半からは、コロナ感染者の緩和により、宮城教育大学教授、長谷川茂先生の相談も再開できたことは良かった。

この3年間は、教務・担任の家族支援に関する仕事量が急増傾向にあるので、次年度は、地域子育て支援についての専門職を配置し、より良い子育てを目指し家族支援に努めたい。また、保護者との情報交換についてICT化をより進めていく。

学校関係者の評価 《宮城教育大学名誉教授 長谷川 茂》



2022年度は、バスの置き去り事故や保育士の虐待など、小さな子をもつ親にとって衝撃的な出来事が多く報道された。これらのニュースを対岸の火事とせず、今までの在り方を振り返る機会として捉え、園生活を送る子ども達と託してくれた保護者の方々の信頼を裏切ることのないよう努めたい。バス事故報道の頃、下野新聞にこの園の取り組みが掲載された。これまでも保育内容は書籍等で紹介されてきたが、3.11の除染作業や今も続く給食の線量検査、コロナ禍での感染対策など、安全についての活動も広く発信していきたい。

また、朝日新聞のコラムでは福本園長が紹介された。地元の記者が日頃から注目してくれることは、園が地域に認められているということであり、とても心強い。記事の中で「言語聴覚士も白衣ではなくエプロンをつけ、オムツも替えるという部分がある。

働き方や求められることが医療機関とは異なるも、園(シャローム)の中で専門職という誇りを持ち、子どもと向き合う人がいる。このような働き方を知ってもらうことで、障がい児保育における専門性をアピールすると同時に、今後の人材獲得につながることを期待する。

2021年9月には医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律(通称:医療的ケア児支援法)が施行され、医療的ケア児や障がい児への支援に注目が集まった。この園は65年前の開園当初から障がい児保育に力を入れ、加配保育者も充実している。支援からスタートした先生の保育はひと味違う。教科書どおりにいかない子どもと向き合い、その子に合わせた教科書を作り上げていくことで見方の原点が変わるためだ。このような視点とスキルを持つ先生たちの存在は、園の宝だと思う。ただ、配慮を要する子は年々増加の傾向にあり、コロナ禍による生活の不安定さなどから、保護者への支援も増加している。課題は多岐にわたることからこれまでの経験が当てはまらず保育者側の疲弊も懸念されている。今後も相談業務を通し、子ども、保護者だけでなく先生たちの思いも受け止めていきたい。

園を訪れる際は、教室で給食をいただくのだが、子どもの持つ力にはいつも驚かされる。ある園児が登園拒否気味であると聞き、隣で食べることにした。表情が乏しい様子だったので、声掛けの他、大袈裟な表情(ウインクや大きく口をもぐもぐなど)を作るなどしてコミュニケーションを試みたところ、少し笑顔を見せてくれた。また、担任の先生の促しにより、苦手な野菜を食べることができていた。翌日、その子の様子を見にいったところ、元気いっぱいはいけるような笑顔で迎えてくれた。

10年前、神奈川県に住む障がいを持つ子のお母さんと知り合った。クリスマスに彼女がプレゼントしてくれた絵本『きみのことがだいすき(いぬいさえこ)』がとても素晴らしかったので紹介したい。この本では、小さな動物たちによって子どもへの愛情が表現され、「なにかを上手にできなくても、みんなと同じようにできなくても」「今のあなたはそのまま、よいこ」など、温かい言葉が綴られている。

私たち大人はどうしてもあれこれ考え、自分の理想をあるべき姿として子どもに重ねてしまう。しかし、いま目の前にいるのは大人が思うとおりに、期待するとおりにならない困った子ではない。いきいきと輝くその姿は、ありのまま素晴らしく、確実に前に向かって進んでいる頼もしい存在なのだ。その小さな一步一步に寄り添い、見つめることが保育者の使命であり、保育という仕事の喜びと誇りなのだと思う。

